

◆その他（委員会活動報告）

臨地実習指導者研修会報告
コロナ禍でのカンファレンスにおける学生の学び
－学生アンケートを通して－

Report on Clinical Practice Leaders'Workshop
Students'Learning at the Conference during the COVID-19 pandemic
-From the results of the student survey-

菅野 由美子¹⁾, 高橋 秋絵¹⁾, 吉原 文子¹⁾, 大久保 和実¹⁾, 小坂 素子¹⁾
齋木 陽理恵¹⁾, 槻木 直子¹⁾, 長井 友利子¹⁾, 服部 律子¹⁾

Yumiko Kanno, Akie Takahashi, Ayako Yoshihara, Kazumi Ookubo, Motoko Kosaka
Yorie Saiki, Naoko Tsukinoki, Yuriko Nagai, Rituko Hattori

抄 録

本学では、臨地実習指導者との連携と臨地実習に携わる教員および指導者の教育能力の向上を目的に、2019年度より年に1回、臨地実習指導者研修会を開催している。2023年度のテーマは「コロナ禍でのカンファレンスにおける学生の学び－学生アンケートを通して－」である。コロナ禍により実習の形態や実習カンファレンスの持ち方が多様化するなかで、学生は実習におけるカンファレンスを通してどのような学びや体験をしているかについてアンケート調査を行い、その結果を基にディスカッションの機会を持った。

アンケートから学生は、指導者から得られる学生の知らない患者の情報、実践に対する具体的な指導、看護師の看護実践に対する語りから多く学んでいることが分かった。また、教員からは、学習や実践に対する具体的な指導のほか、具体的な指導から学び、頑張りを認めるフィードバックによりさらに学びを深めていることが分かった。これらの結果をもとに、臨地実習指導者と教員によるグループディスカッションを行い、学生の指導について大切にしている思いや教育の視点をお互いに共有することで、今後の実習指導における連携や協働につながる視点を学ぶ機会となっていた。

キーワード：臨地実習, カンファレンス, 臨床指導者, 実習指導, 臨地実習指導者研修会

Key words : Clinical Practice Leaders' Workshop, Students' Learning at the discussion, nursing
Clinical Practicum

I. はじめに

看護師養成課程において臨地実習は、看護実践能力の基礎を学ぶ重要な課程である。臨地実習での学びは多岐にわたることもあり、文部科学省「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会看護実習ガイドライン」(2020年)においても、大学と実習施設との連携・協力体制の強化や、実習指導の能力の向上を図る仕組みづくりの重要性が示されている。本学では、臨地実習指導者との連携と臨地実習に携わる教員および指導者の教育能力の向上を目的に、2019年度より実習施設の臨地実習指導者および学生の実習指導に関心のある看護師を対象に年に1回、臨地実習指導者研修会を開催している。

2023年度は「コロナ禍でのカンファレンスにおける学生の学び－学生アンケートを通して－」をテーマとして開催した。2020年度以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、臨地での実習時間に制限が生じ、学内実習や遠隔での実習など、今までとは異なる実習形態をとることを余儀なくされた。また、実習におけるカンファレンスについても、臨地実習でのカンファレンスだけでなく、学内実習のカンファレンスに遠隔で実習指導者の方々に参加頂く機会も増えた。このように、実習方法やカンファレンスの在り方が多様化してきたなか、学生は実習のカンファレンスを通して、自身の体験や思いを表現し、他の学生や実習指導者、教員と共有することで学びを深めており、これまで以上に実習におけるカンファレンスの意義を実感した。そこで、学生が実習におけるカンファレンスを通してどのような学びをしている

¹⁾ 神戸女子大学看護学部看護学科
Kobe Women's University, Faculty of Nursing, Department of Nursing

のか、どのような体験が学びにつながったかについてアンケート調査を実施した。その結果をもとに、臨床指導者と教員が実習における効果的なカンファレンスについて検討し、多くの学びを得ることができたため、ここに報告する。

II. 臨地実習指導者研修会開催概要

1. 開催時期・方法

開催日時：2023年6月27日（火）14時～16時

開催方法：神戸女子大学看護学部（会場参加）とオンライン参加のハイブリッド開催

2. 参加者について

参加者は臨地実習指導者48名（14施設）、本学教員31名であり、臨地実習指導者のうちオンライン参加は47名、会場参加1名であった。

3. 臨地実習指導者研修会のプログラム

話題提供①：

「本学の臨地実習の位置づけについて」

神戸女子大学看護学部 教授 服部律子

話題提供②：

「コロナ禍でのカンファレンスにおける学生の学び
ー学生アンケートを通してー」

神戸女子大学看護学部 講師 菅野由美子
グループディスカッション（意見の共有）：

「効果的なカンファレンスのための実習指導者や教員の役割について」

III. 話題提供の内容

「コロナ禍でのカンファレンスにおける学生の学び
ー学生アンケートを通してー」

1. 学生へのアンケートの概要

学生へのアンケートは、実習を終えた3年生（87名）・4年生（88名）の合計175名を対象に実施した。その結果、アンケートの回収率は、76名（43.3%）であり、3年生（44.7%）、4年生（55.3%）であった。また、この3年生、4年生は、一部の実習に制限があり、全ての実習を臨地で経験することができていない学生も含まれていた。

アンケート内容は、①カンファレンスはどのような要素で学びが深まると思うか、②指導者・教員のどのような助言によって学びが深まっているか、③実習のカンファレンスの中で学んだことや自分の成長につながったと感じたエピソード等について、選択肢または自由記述での回答を求め、結果については、選択肢での回答は度

数分布、自由記述の内容は、記述内容を示すサブカテゴリーを作成して類似する内容をまとめてカテゴリーを抽出し、件数とともに整理した。

アンケート実施に際して学生には、臨地実習指導者研修会での資料とすること、調査の結果は個人情報特定されない形でまとめ、臨地実習指導者研修会で報告すること、大学の紀要等に調査結果を公表することを説明した。また、アンケートはオンライン上のアンケートフォームを使用し、個人が特定されることはなく、自由な意見を述べられ、強制力の働かない環境を作るように配慮した。

2. アンケート結果報告：カンファレンスでの学生の学びについて

カンファレンスを通して、学びが深まった体験があるかについて、93%の学生があると答えた。その内容について選択肢にて回答を求めたところ、他の学生の体験を聞く（88.2%）、実習指導者の助言（86.8%）、教員の助言（78.9%）、自分の体験の語り（63.2%）、学生間のディスカッション（59.2%）であった。そこで、実習指導者および教員からの助言によって学びが深まった内容・印象に残っている指導、カンファレンスでの学びについて尋ねた。

1) 実習指導者の助言によって学びが深まった内容

カンファレンスにおいて、実習指導者のどのような助言によって学びが深まったかについて、選択肢での回答を求めた。その結果、患者のアセスメントに関する助言（71.1%）、学生の患者への関わり方への助言（68.4%）、指導者の看護実践についての語り（65.8%）、学生の看護実践に関するコメント（61.8%）、疾患や治療に関する知識の提供（55.3%）、カルテには記載のない患者の情報（38.2%）が得られた。

(1) 「実習指導者のどのような助言で学びが深まったか」の内容について

実習指導者の助言が学びにつながった具体的なエピソードに関する自由記述の内容からサブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、整理した結果を表1～3に示す。また、実習指導者の印象に残っている指導や学びの内容については表4に示す。以下、カテゴリーを【】、学生の記述内容を「」で示す。

①患者の情報収集・アセスメントに関する内容

実習指導者からの助言で得られた学びについては、【患者のアセスメントに関する助言】（23件）、【疾患や治療

表1：患者の情報収集・アセスメントに関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
患者のアセスメントに関する助言 (23件)	観察や考察のポイントを教えてくれた (8件)	報告の際に自分のアセスメントを報告すると他にもみるべきところや考えられることを教えていただき学びが深まりました (3年生)
	別の視点、気づいていない点を教えてくれた (5件)	自分が考えた内容を言ったときに患者の場合は違うと指摘していただき、助言をくださった (3年生)
	根拠を問われたことで深まった (4件)	根拠を何か聞かれることで自分が実際に行わなければならないケア、行う必要性について考え直すことができた (3年生)
	教科書にはない視点を教えてくれた (3件)	ラーメンを食べに行ってしまう糖尿病患者さんのアセスメントの助言など (3年生)
	優先順位を教えてくれた (2件)	現在の最も優先するべき問題など、理由を学生と一緒に考えながら助言して下さった (4年生)
疾患や治療に関する知識の提供 (3件)	不足している知識について教えてくれた (3件)	先天性心疾患など患者の状態により疾患や症状が様々に複雑なときに、受け持ち患者の状態について教えていただいた。そのことで、より患者のことを理解でき、患者との関わりや看護計画の立案がしやすくなった (4年生)
カルテには記載のない患者の情報 (17件)	不足している情報や別に視点を教えてくれた (13件)	自分が捉えている患者像に加えて、違う視点での患者像を教えてもらい、そのような見方もあるのかと学びになった (3年生)
	学生が関わっていない時の患者の様子を教えてくれた (4件)	自分が患者と関わった後の患者の様子などについて話を聞き、そこからどのように関わればよかったか新たに考えられた (4年生)

に関する知識の提供】(3件)、【カルテには記載のない患者の情報】(17件)の3つのカテゴリーを抽出した(表1)。また、印象に残っている指導の内容(9件)の記述があった(表4)。

そこから、学生が気づかないアセスメントや観察の視点、学生が得られていない情報や知識の提供により、調べるべきポイントやヒントを得て考えるきっかけにつながり、学びが深まる体験になっていることが分かった。

②看護実践に関する内容

実習指導者からの助言で得られた学びについては、【学生の患者への関わり方への助言】(12件)、【学生の看護実践に対するフィードバック】(10件)の2つのカテゴリーを抽出した(表2)。また、印象に残っている指導の内容(25件)の記述があった(表4)。

ここから、患者の性格や学生の実践を踏まえた具体的なアドバイスが学びにつながっていることが分かった。

表2：看護実践に関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
学生の患者への関わり方への助言 (12件)	患者の性格や背景を考慮した関わり方をアドバイスしてくれた (5件)	患者さんへの関わり方に関する助言をいただき、入院している患者の体験や言動の背景にあることやその理由を考えることの大切さを学んだ (3年生)
	具体的なかかわり方についての助言 (2件)	どう接していけばいいのか悩んでいたことをテーマにカンファレンスをした時に具体的なアドバイスをいただいた (3年生)
	関わり方を一緒に考えてくれた (1件)	学生の関わり方によって患者に変化があったことを伝えて下さったり、もっとこうすればいいんじゃないかと一緒に考え、助言をしてくださったこと (4年生)
	別の方法を提案してくれた (3件)	他にどのような方法があるかの提案を行なってくださった (3年生)
	コミュニケーションの工夫を教えてくれた (1件)	コミュニケーションの工夫 (3年生)
学生の看護実践に対するフィードバック (10件)	学生の関わりに対して肯定的な評価をしてくれた (5件)	患者に対する関わり方や看護計画、ケアの実践がこれで良かったのかと考えた時に、いつも肯定的な助言をくださったこと (4年生)
	学生の実践を承認してくれた (3件)	学生の学びを実践に活かす場を作ってくださったため、考えた看護計画に何が足りないのか、どう工夫したら良いかを考えることができた (3年生)
	患者の様子を踏まえたフィードバックをしてくれた (2件)	自分が行ったケアに対して指導者の方が患者さんに直接感想を聞きに行ってください、フィードバックできた (4年生)

看護師の実践に基づいた関わり方を伝えてもらうことで、看護師・看護学生としての患者への向き合い方を学ぶ機会となっていたことが分かった。

③看護師の看護に対する考え方に関する内容

実習指導者からの助言で得られた学びについては、【看護実践についての語りを聞く】(13件)の1つのカテゴリー

表3：看護師の看護に対する考え方に関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
看護実践についての語りを聞く (13件)	看護師の実践を紹介しながら助言をしてくれた (12件)	受け持ち患者の病棟カンファレンスに参加させていただき、指導者の方を含めそれぞれの看護師の方の看護経験を基に色々な考え方を教えていただいた。視野を広げて考えることの重要性を実感した (4年生)
	家族へのケアについての実践を語ってくれた (1件)	コロナにより家族の面会ができておらず、家族を含めた看護を見学することが出来なかったため家族を含めた退院支援の助言が新しい学びになった (4年生)

表4：実習指導者からの助言で印象に残っていること、学びになったと感じたこと

1. 患者の情報収集・アセスメントに関する内容 (9件)	
カテゴリー	代表的な記述の具体例
学習への助言	その治療を受けた患者がどう感じる場合が多いかなど、教科書には無く臨床経験からわかる知識を教えてください (3年生)
	考えてきてと言うだけでなく、少しのヒントをくださることによって学びのきっかけが作れたと感じた。そのような関わりを受けてすごく学びが深まったので、すごく困っていたときに助かった (3年生)
	患者の日常生活をアセスメントするために何の情報が必要なのかということを学生に質問することによって考える機会を与えてくださった。考え方の視野を広げて患者へのかかわりかたを工夫することにつながった (4年生)
2. 看護実践に関する内容 (25件)	
カテゴリー	代表的な記述の具体例
学生の患者への関わり方への助言 (19件)	学生であるが、自分たちの言葉で患者に安心や楽にさせることができる。しかし逆に不安にさせることもあるため質問の意図をしっかりと考えて質問する必要がある (4年生)
	看護師は何でも屋じゃないから患者のできることを引き出すことも必要である (4年生)
	患者のことを第一に考えるために時に聞きにくいことも聞いていく必要がある (3年生)
学生の看護実践に対するフィードバック (16件)	不安だったよね、という声かけで自分の関わりが肯定された気がして、すごく安心した (3年生)
	疾患だけでなく生活背景のところにも焦点をあてて考えることができるのがすごいと褒めてくれた。実際の看護師さんから笑顔で褒めてくれたことはとても自信になったしこの先も頑張ろうと思った (4年生)
	報告に対してこういう点も勉強したほうが良いと言ってくれたり自分のケアに対するフィードバックがあるとより学びになったと感じた (3年生)
3. 看護師の看護に対する考えに関する内容 (14件)	
カテゴリー	代表的な記述の具体例
看護の考え方や看護観 (14件)	患者を見守る、信じるのが大切であるという助言 (4年生)
	どのような患者であっても、1人の人間として接する必要性。患者への声掛けや挨拶、何気ない会話であっても小さなことの積み重ねで信頼関係に結びつくことを学んだ。私はこれから様々な患者と出会う中で、コミュニケーションの難しい患者に対しても、人に対する基本的な姿勢をしっかりと忘れずにしていきたいと改めて考えることができた (3年生)
	患者さんの思いを大切にすることがいちばん大切であるということ (4年生)
	看護は1人でするものではないから、患者が亡くなった際などの気持ちの揺れ動きなどは1人で抱え込まずに他者に話すことも必要であるということ (3年生)
	領域ごとに様々な学びをすることができたが、1年生時の最終実習のカンファレンス後に「看護師はそれぞれ看護観というものを持っており、これから自分自身の看護観をみつけていってください」と言われたことがとても印象に残っている。まだ何も専門的なことが分からなかったが、その後の実習や勉強の時に思い出し、自身の看護観について思い出している (4年生)

リーを抽出した(表3)。また、印象に残っている指導の内容(14件)の記述があった(表4)。

ここから、実習指導者の実践の語りを聞くことで、看護として患者に向き合う姿勢だけでなく、看護として大切にしたい看護観に触れる体験が深い学びにつながっていることが分かった。

④その他

その他として、3件の記述があった。「一緒に考える姿勢」、「学生の強みを教えてくれる助言」など、学生に寄り添って指導にあたる看護師の姿勢が学生の中に印象強く残っていた。

(2) カンファレンスにおける実習指導者の助言からの学生の学び(まとめ)

カンファレンスにおいて、臨床指導者からの助言は、学生が知りえない患者や家族の新たな情報や患者をアセスメントする視点を教えてもらう機会となっていた。また、看護実践における関わり方を伝えてもらうことで、看護師・看護学生としての患者への向き合い方を学ぶ機会となり、指導者の看護実践を知ることは学生にとってモデルとなる看護実践を学ぶことにもつながっていた。このことから、指導者の看護実践の語りを聞くことは、指導者の看護観に触れる重要な機会となり、学びが深まる体験をしていることが分かった。

2) 教員からの助言によって学びが深まった内容

カンファレンスにおいて、教員のどのような助言によって学びが深まったかについて、選択肢での回答を求めた。その結果、学生の患者への関わり方への助言(77.6%)、患者のアセスメントに関する助言(76.3%)、

学生の看護実践に関する肯定的なコメント(71.1%)、疾患や治療に関する知識の提供(67.1%)、教員の看護実践についての語り(46.1%)が得られた。

(1) 「教員のどのような助言で学びが深まったか」の内容について

教員の助言が学びにつながった具体的なエピソードに関する自由記述の内容からサブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、整理した結果を表5～7に示す。以下、カテゴリーを【】で示す。

①患者の情報収集・アセスメントに関する内容

教員からの助言で得られた学びについては、【患者のアセスメントに関する助言】(23件)、【疾患や治療に関する知識の提供】(10件)の2つのカテゴリーを抽出した(表5)。そこから、学生は教員に対して学生の実践を振りかえった具体的なアドバイスを求めていることが分かった。

②看護実践に関する内容

教員からの助言で得られた学びについては、【学生の患者への関わり方への助言】(14件)、【学生の看護実践に対する肯定的なフィードバック】(19件)の2つのカテゴリーを抽出した(表6)。ここから、学生は患者のアセスメントや学習に対する必要な指導と共に肯定的なフィードバックをすることで学びが深まる体験をしていることが分かった。

③教員の看護に対する考え方に関する内容

教員からの助言で得られた学びについては、【看護実践についての語りを聞く】(3件)の1つのカテゴリーを抽出した(表7)。ここから、教員の実務経験から生

表5：患者の情報収集・アセスメントに関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
患者のアセスメントに関する助言(23件)	一緒に考えてくれた(4件)	どのようにアセスメントから看護計画に移して良いか分からなかった際に一緒に悩んでどのように看護実習を進めていくか道をさし示してくれた(3年生)
	根拠や方向性が整理できた(6件)	根拠を引き出してくれるように聞いてくれるため、自分の中でまとめたり、言葉にしたりすることができた(3年生)
	別の視点、気づいていない点を教えてくれた(8件)	看護技術をしているときに技術に必死で患者さんの表情など見れていなかった部分を見学していた先生から教えて貰えた(4年生)
	患者の視点を教えてくれた(5件)	実際に行った看護が患者に対してどう影響していたのか、患者の意見も含めて教えていただいた(4年生)
疾患や治療に関する知識の提供(10件)	教科書だけではわからない知識の提供を受けた(6件)	疾患や治療など自身で調べてもよく理解できなかったことを教えてくださることやコメントもらえることで自身の看護展開に活かすことができた(3年生)
	学習のポイントや学習方法のアドバイスをしてくれた(4件)	アセスメントなどの仕方がまだ慣れておらず分からなかった際に教えていただいた。また病態生理についても教わって理解が進んだ(3年生)

表6：看護実践に関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
学生の患者への 関わり方への助 言 (14件)	具体的な方法をアドバイスしてくれた (7件)	上手くいかなかったかなと少し落ち込んでいた時に、どこが良かったのか、どこをもう少し工夫してみたら上手くいくのか助言してくれた (4年生)
	的確な助言をしてくれた (5件)	どのように関われば良いかのアドバイスをしてくださった (4年生)
	考えを一緒に整理してくれた (2件)	どう進めていったら良いのか頭が混乱している時、一緒に考えたりこうした方がいんじゃない?というような学生が困っている時に助けて下さった (3年生)
学生の看護実践 に対する肯定的 なフィードバック (19件)	肯定的なフィードバックで学生のやる気や自信、安心を引き出す声掛けがしてくれた (5件)	朝の行動調整の確認や記録を見てもらった際に良いところや修正するところを教えていただき学びが深まりました (3年生)
	学生のがんばりを認めてくれた (5件)	関連図の発表で、ご指摘をたくさん頂くことで不足した部分が明らかになり、翌週以降のアセスメントを深めるきっかけになっていましたが、その分、教員からの「がんばりましたね」のひとつで、努力していることを見てもらえていると思えて、次に進むための力になっていました (4年生)
	肯定的に捉えられる声掛けをしてくれた (3件)	自分では気づかなかった患者のアセスメントの視点や、「できていない」というネガティブな思い込みに対して肯定的に捉え直すことができた (4年生)
	学生が気づいていない点を承認してくれた (3件)	自分の中では何ができたか分からなかった時でも何が今の自分にできているのか教員から見た立場で伝えてくれるため、自分の頑張りを実感できた (3年生)
	学生の実践を具体的に褒めてくれた (3件)	患者との関わりが上手くいかなかった時など、親身に話を聞いてくださり、話を聞いた上で自身の良かった点や改善点をアドバイスして下さり、翌日自信を持って患者と関わる事ができた (4年生)

表7：教員の看護に対する考え方に関する内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
看護実践について の語りを聞く (3件)	経験から生まれる助言 (3件)	終末期の患者を受け持った際に、患者の死との向き合い方について実際の経験を踏まえながら助言を下された (3年生)

まれる助言が学びを深める体験につながっていることが分かった。

(2) カンファレンスにおける教員の助言からの学生の学び (まとめ)

学生は、臨床指導者からの助言と同様に、実践につながる助言を教員から得ることで学びにつながっていた。加えて、学生ができていることをフィードバックする関わりにより、学びが深まる体験をしていた。特に、学生自身の頑張りを認める、実践を具体的にほめるなど、学生自身が承認される声掛けによって学びが深まったという回答が多く、教員が学生を承認することによって自信をもって実習に臨むことにつながっていることが分かった。

3) カンファレンス全体を通して学生が学んだことや成長につながったと感じたエピソード

学生がカンファレンスの中で、学んだことや自分自身

の成長につながったと感じたエピソードについて、カテゴリーで分類を行った。その結果、【新たな学びの視点を得る】(19件)、【最適な看護実践の検討につなげる】(19件)、【自分の実践を振り返る】(8件)、【自信・安心につながる】(6件)、【伝える力、相手の話から学びを深める力を高める】(12件)、【実習を継続する力になる】(3件)の6つのカテゴリーを抽出した(表8)。

これらから、学生はカンファレンスにおいて、患者の看護について新たな視点や考え方、関わりに気づき、自分の実践を丁寧に振り返り整理をする機会を得ているだけでなく、学生の実践や関わりが承認されることで、自信やモチベーションにつながり、実習を継続する力になっていた。さらに、指導者の看護観に触れることで自分の看護観を考えるきっかけとなっていた。また、カンファレンスで他者への伝え方、他者の体験を自分に引き寄せ学びとする力が養われていた。

表8：カンファレンスの中で学んだことや成長につながったと感じたエピソード

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な記述の具体例
新たな学びの視点を 得る (19件)	他の学生や自分と異なる意見から新たな視点を 得る (12件)	他学生の学びを共有したり、悩みなどについて話し合う機会があることで、問題を追求することができた。また解決方法やより良い関わりを行うためにはどうするべきかなど、一つ一つ丁寧に話し合い、学生一人一人の視点や考えを共有することができ、新たな視点を 得ることに繋がった (3年生)
	他の学生の受け持ち患者から学ぶ (4件)	他者の意見を聞いて、自分が受け持っていない患者さんとの新しい発見とかを聞いて1人しか受け持っていないが他の子の受け持ちの患者のことも一緒に考えたいと思う (4年生)
	指導者の看護観に触れる (3件)	指導者の方からどのようなことを大切に看護しているのか話して いただいたこと (3年生)
最適な看護実践の 検討につな がる (19件)	患者の理解につながる (8件)	似た疾患を持っている患者を受け持った学生の話聞いて、看護課題が重複していたものの優先順位やその人ならではの課題があることを知り、個別性の大切さを学ぶことが出来た (4年生)
	アセスメントが深まる (3件)	事例紹介をすることで、患者の理解に繋がった。他学生からの意見で、自分では思いつかなかったアセスメントやケアを思いつくことが できた (3年生)
	助言により良い実践につながった (4件)	患者への介入の仕方を悩んでいた際にメンバーからアドバイスを受けた。それを参考に介入方法を工夫するとうまくいった。この体験を通して、自己への自信やカンファレンスの意義を大きく実感することが できた (4年生)
	最適な実践方法を考えることができた (3件)	いろんな場合の関わりをお互いの経験や考えを出すことで事例を挙げた患者に対する最適な方法を考えることができたこと (3年生)
	問題解決につながった (1件)	受け持ち患者への課題に対して、悩んでいたところカンファレンスを通して別の視点からの解決方法を得ることができた (4年生)
自分の実践を振 り返る (8件)	実践に関する指導をもらえた (6件)	自分が疑問に感じたことをテーマにして学生や教員から指導してもらった (3年生)
	体験を話すことで自分の考えが整理される (2件)	自分の経験を話すことによって、自分の考えが整理された (3年生)
自信・安心につ ながる (6件)	肯定され、一緒に考えてもらうことで安心につながった (3件)	自分の中ではどのように関わるか混乱していた時も他の学生や教員からどう関わればいいのか伝えてもらえ一緒に考えてもらえ、安心したし、患者の看護についての考え方や関わり方を知ることができた (3年生)
	自信につながった (3件)	自分のやり方があったのか分からず、他の学生とカンファレンスで話し合っ て自分の関わり方が間違っていないと思えたこと (4年生)
伝える力、相手の話から学びを深める力を高める (12件)	自分の苦手な部分に気づくことができた (8件)	人の話を聞くことの大切さや自分が苦手とする部分に改めて気付くことが できた (3年生)
	伝える力、相手の話から学びを深める力につながった (4件)	自分が思っていることを言語化して伝える力、相手の話から自分の学びを深める力を得ることができた (3年生)
実習を継続する力になる (3件)	実習を進めるモチベーションにつながる (1件)	発表に向けて、ということ意識して、情報収集やアセスメント、関連図の作成をすることが、モチベーションになっていました。そのおかげで、自分にできる精一杯の努力ができたと思います (4年生)
	一緒に乗り越えたグループ間の協調性が生まれる (1件)	グループメンバーが困っていることや良かった点について全員で共有し、意見を出し合っ て一つひとつの壁を乗り越えていくといった協調性が身についた (4年生)
	実習のイメージを持つことができた (1件)	初めての領域実習で、学生としてどんなことができるか話し合ってください、と指導者に言われ、考え話し合ったことで、3週間の実習のイメージが ついた (3年生)

4) 実習のカンファレンスにおける学生の学びの様相 (まとめ)

- 限られた自らの実習体験を振り返り、仲間と共有し、他者の看護実践に触れることを通して実習におけるアセスメントや実践を様々な角度から深める体験をしている。
- 実習に取り組む意識や仲間との協調性を育む契機となっており、それが実習を継続する力につながっている。
- 人に伝え、他者の学びを引き寄せ学ぶ学習者としての姿勢を学ぶ機会となっている。
- 看護職の考えや体験に触れる機会から、看護職を目指す学生としての姿勢や看護観を深く考える機会となっており、効果的なカンファレンスが学生の学びを深める体験につながる。

IV. 臨床指導者・教員のグループディスカッション

臨床指導者・教員をそれぞれ4～5名ずつ配置した小グループを作成し、「効果的なカンファレンスのための実習指導者や教員の役割について」ディスカッションを行った。

そこで下記のような意見が出された。

1. 臨地実習のカンファレンス参加の現状

臨地実習のカンファレンスへ指導者が毎日参加することが難しい現状もあり、看護師間で学生の情報を引継ぐ必要性や、カンファレンスの中でも学生に対して支持的に関わる工夫を行っている意見が出された。

具体的な意見：

- カンファレンスに同じ指導者が参加することはできないが、その場合は、看護師間で引継ぎができるような工夫が必要であると感じている。
- コロナ禍で学習してきた学生はこれまでの臨地実習経験が乏しいことを予めスタッフに説明し、出来るだけ学生に支持的に関わる環境を作るようにしている。
- 学生へはティーチングではなくコーチングという手法で関わるようにしている。

2. 指導者と教員の役割について

学生個々に合わせた指導や助言、指導者の指導内容のフォローなど、指導者と教員がコミュニケーションを通して関係を築くことが重要であるという意見が多く出された。

具体的な意見：

- 教員は学生が実践の中で気づいたことや疑問に思ったことを指導者にフィードバックし、指導者から実践の意味や大切にしていることを伝えてもらえるように連携していく。このことで学生自身が実践をするために必要なことを身につけられるのではないかな。
 - 振り返って考えさせたことや病態など指導したことなど、次の実習につながることはお互いに共有していく。
 - 教員とのコミュニケーションが取れないと、何に力を入れて指導すればいいか、どう次の学びにつなげていったらいいのかわからないので、その辺を教えてほしい。また、カンファレンス等での指導がどうだったのか教員のほうからフィードバックが欲しい。
 - 学生のことを一番理解しているのは教員のため、指導者が行った指導内容を、その学生に応じた指導のフォローを行ってもらう。学生によりよい指導を行うためには、指導者と教員の関係性の構築、コミュニケーションが大事である。
 - 学生グループの特徴や学生個々の特徴や学習状況を共有することで、指導の方向性を共有でき、グループや学生個々にあった指導や助言が行える。
- ##### 3. カンファレンスの持ち方について
- 効果的なカンファレンスを行うためにテーマ選定に関する指導や、学生がカンファレンスで発言しやすい環境を作ることも重要であるとの意見があった。
- 具体的な意見：
- 学生主体でカンファレンスのテーマを考えて実施できるように関わるようにしている。しかし、うまくテーマを決めることができず、実習の段階とあっていないテーマのこともあるため、個々の学生やグループの特徴を見極めて、テーマ設定からアドバイスすることも必要と考える。
 - 学生が自分の考えを伝える発言する能力を培うこともカンファレンスの役割なので、学生が発言できる環境を作る。
 - カンファレンス実施前に実習指導者と教員が打合せをしておき連携して学生に関わるのが大切である。論点を共有しておくことや学生の特徴などを予め理解しておくことが効果的な指導につながる。
 - 学生は非常に緊張が強く、その緊張をどうほぐしてあげるかも大切。緊張もあり、日々新しい情報にさ

らされて目標がぶれることもあるので、毎日カンファレンスの始めに目標を学生とともに見直して確認する作業が大切ではないか。

4. 本研修会参加の感想

本研修会参加に関して、自身の指導を振り返る内容や、今後の指導につながる気づきや学びにつながったという意見が多かった。

具体的な意見：

- ・カンファレンスでの学生の学びや気づきが分かり、指導者がどう関わればよいかを知る機会となった。
- ・経験したことなど具体的なテーマでディスカッションを行うとカンファレンスの内容を今後につなげていけるのではないかと考えることができた。
- ・患者のアセスメントに対して、指導者が答えを出すのがいいのかというためらいはあったが、現場でどうアセスメントしているかについても、学年が上がるごとに指導をしていきたいと思った。
- ・発表の内容から、臨地実習指導者がカンファレンスに入ることが学生の学びにつながっていることがわかり、スタッフに伝達したいと思った。
- ・発表をふまえた上で、同じ指導者同士で意見交換ができ学びが深まった。

V. 開催後アンケート結果からみる臨地実習者研修会の評価と今後の課題

今回の研修会後のアンケートにおいて、64名の回答があった。話題提供について、満足48.4%、やや満足43.8%、普通7.8%の回答があった。その理由として、「実際学生がどのように感じているのかわかり面白かった」「学生がカンファレンスでどのようなことをきっかけに学んでいくのかわかった」という意見があった。指導者は日々実践の場面で学生に対峙し指導をしているが、実習後の振り返り報告はあるものの、臨地での体験が学生のなかでどのように洗練され、学びにつながったのかを実感する機会が少ない。そのため、学生への指導や助言がどのように学生の学びにつながっているのかについて具体的に知ることは、指導者としての指導を振り返る意味で重要な機会であったと考える。

また、「グループディスカッション」について、満足53.1%、やや満足40.6%、普通4.7%、やや不満1.6%という回答があった。その理由として、「教員の思い、現場の思いを共有することができ、どう学生と関わっていけば効果的なカンファレンスが行われるか知ることができ

た」「どのようなことを意図して指導しているのかを感じる意見が多く、教員と指導者の歯車が噛み合うような関わりを学生に対して行うことで、学生の学びをより深めることができると感じた」と教員と指導者のディスカッションを通して、学生の指導について大切にしている思いや視点をお互いに共有することで、今後の実習指導における連携や協働につながる視点を学ぶ機会となっていた。さらに、「他病院や教員の話聞き、カンファレンスで気をつけているところや、困りごとを共有できて学びになった」「悩みを共有できてよかった」と、他施設の指導者同士のディスカッションは、日々の悩みなどを共有でき指導者としてお互いが共感し、エンパワーされる体験につながっていたと言える。

今回、臨地実習施設の指導者48名の参加があり、会場参加とzoom参加のハイブリッドで開催したことで、オンラインでの参加がしやすいという回答が多かった。また、コロナ禍で院内研修が行えなかったこともあり、オンラインで参加できることから院内研修として参加された施設の方も多かった。そのため、施設から一つの媒体で複数名がオンライン参加された方は「ディスカッションは上司も内容を聞いているので、本音が言いにくい部分もあった」「グループ人数が多く全員の意見を十分に聞くことができなかった」と指導者の参加方法や環境による難しさもうかがえた。

今年度のアンケートから、オンラインでの参加方法は、勤務時間中に参加しやすく、効果的であったと考えるが、それぞれの指導者が効果的に学ぶことや、教員との関係構築の上では、個々での参加や会場参加を積極的に行っていく必要もあると考える。

VI. おわりに

2023年度の臨地実習指導者研修会では、多くの臨床指導者に参加いただくことができた。今後は、従来の臨地実習の方法に、新しい実習形態を取り入れた教育がなされ、学生もまた今までとは異なるレディネスを備え実習に行くことが予測される。そのため、今後も臨地実習指導者研修会の機会を設けることを継続し、教員、指導者の連携を深め、より効果的な教育につなげていく。

今回研修に参加くださった指導者、よりよい実習指導につなげるためにアンケートに協力してくださった学生の皆様に感謝申し上げます。なお、本研修会の開催および報告書作成にあたり、報告すべき利益相反はないことを申し添える。

【引用文献】

- 一般社団法人日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会.
(2020). 看護学実習ガイドライン. 参照先: 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告: https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf